

2026年1月17日(土)に、第1回「北河内ダイアベティス テリアの会」を開催いたしました。何やねんそれ?はい、北河内地域の急性期二次・三次医療を支える3大病院、関西医科大学付属病院・枚方公済病院・市立ひらかた病院で糖尿病治療に従事する医師が一堂に会し、合同で行う症例検討会です。何でテリアやねん?下のチラシをご覧ください(笑)。

## 「北河内ダイアベティス テリアの会」

日時 2026年1月17日(土) 15:00~17:00

会場 枚方市総合文化芸術センター 別館4階 第5会議室

プログラム

**開会の挨拶 15:00~15:05**  
枚方公済病院 糖尿病センター長 田中 永昭 先生

**症例検討会 15:05~16:50**

**司会**  
市立ひらかた病院 糖尿病・内分泌/糖尿病センター長 柴崎 早枝子 先生

**ファシリテーター**

関西大学医学部附属病院 内科学第二講座 診療教授 入江 潤一郎 先生  
枚方公済病院 糖尿病センター長 田中 永昭 先生  
市立ひらかた病院 糖尿病・内分泌内科 部長 高本 晋吾 先生

**症例検討 1 題目 15:05~15:35**  
市立ひらかた病院 糖尿病・内分泌/糖尿病センター

**症例検討 2 題目 15:45~16:15**  
枚方公済病院 糖尿病センター

**症例検討 3 題目 16:20~16:50**  
関西大学医学部附属病院 内科学第二講座

**閉会の挨拶 16:55~17:00**  
関西大学医学部附属病院 内科学第二講座 診療教授 入江 潤一郎 先生

北河内地域はテリア犬に似ていませんか?

主催:北河内ダイアベティステリアの会

各医療施設から 1 題ずつ症例を出し合い、どこに苦慮しているのか、今後どのように治療していくべきか、もっと良いアプローチの仕方はないか、などとテーマに沿ってみんなで話し合うディスカッション形式の症例検討・勉強会です。3 病院から卒後 10 年目までの内科医師を中心に、たくさんの若手が参加してくれました。「ガイドラインに沿った基本的な診療技術は身につけたけれど、難治症例にはどのように対応したら良いのだろうか？」そのような疑問を持つ若手医師が更なる研鑽を積むために、北河内地域全域からはるばる集まってくれました。A～C グループの 3 班に分かれ、各班に 1 名ずつファシリテーター（指南役）が付きます。ファシリテーターは、各グループでの意見交換や合意形成を先導し、議論を円滑に進めるためのサポート役を務めます。主任部長は、全体の司会進行役を仰せつかりました。マイク握りっぱなしの主任部長です（笑）。

さあ、始めましょう！ 1 題目は我らが市立ひらかた病院の症例です。88 歳男性、3 年前に 1 型糖尿病を発症。前医では高齢のため QOL（quality of life, 生活の質）を考慮し、治

療負担の少ない 1 日 1 回のインスリン注射による治療が選択されましたが、血糖値は良くなりませんでした。次第に、糖尿病性神経障害による足の痺れと痛みが悪化して歩けなくなり、当科を紹介受診されました。血糖値を良くしなければ足の痺れと痛みは良くなりません。本患者さんは、ご高齢ですが認知症はなく、1 日 4 回の強化インスリン注射療法とリアルタイム持続血糖測定器による血糖測定を導入することになりました。注射の回数が 1 日 1 回から 4 回になると言うことは、患者さんの治療負担が増すと言うことです。そして認知症がないとは言え、88 歳の男性が最新式の血糖測定器の使い方を習得するのは至難の業です。同居の長女さん夫婦に支援体制の構築を依頼する必要がありました。ここで議論となったのは、「QOL 重視・治療負担の少ないインスリン治療と、厳格な血糖値管理を目指した・負担の多いインスリン治療のメリット・デメリットについて。」



最初は恥ずかしそうにしていた若手医師達も、ファシリテーターに促されて自分の意見を発表します。様々な意見が飛び交い、違う角度からの鋭い考察に議論が盛り上がりました。答えは一つではありません。はっきりした結論があるわけでもありません。皆、自分とは違う意見に大いに感銘を受けているようでした。2 題目は、仕事のストレスから飲酒量が増え、血糖コントロールが悪化した 61 歳男性に、治療に取り組む熱意を取り戻してもらうにはどうしたら良いか？ 3 題目は、インスリン注射による治療が必須なのに、インスリンアレルギーになってしまった 1 型糖尿病患者さんをどうやって治療したら良いか？ いずれも超難題ですが、皆で一生懸命ディスカッションを重ねました。

テリアの会が終わって、ファシリテーターの先生から頂いたお言葉です。「参加された若手医師の皆さんが熱心に症例のディスカッションしている姿を見て、もし当の患者さんがこの光景を見たらきっと喜ばれるだろうとひそかに感激していました。小生にとりましても、とても刺激的で楽しい会でした。枚方の糖尿病の将来は明るいと思いました。」

「北河内地域に顔が見えて、同じフィロソフィーを持つ同年代の医師がおられるのは、若手に安心と刺激になるものと思います。是非また来年も宜しくお願い致します。」



我々の目標である“北河内地域により良い糖尿病治療を提供する”ためには、関西医科大学付属病院・枚方公済病院・市立ひらかた病院が共に手を取り合って前に進むべきだと信じます。そして“北河内地域にさらに良い糖尿病治療をこれからも提供し続ける”ためには、志のある若手を立派な糖尿病内科専門医に育てる責務があるとも信じます。

入江先生、田中先生、素敵な勉強会を一緒に立ち上げて下さって本当にありがとうございました ♡♡♡